

乙 貞

第86号 通巻16巻第1号
1996年5月31日 発行

守山市立埋蔵文化財センター
☎0775-85-4397

☎524-02
守山市立服部町2250番地



△ 伊勢遺跡大型建物復元図

☆ は じ め に

桜が散り、若々しい新緑の季節を迎えています。守山市内でも街路樹や土手の木々の枝に、鮮やかな緑の葉が吹き出しているのが観察されます。この季節になると自然の生命力の不思議な力、力強いエネルギーに驚かされ、あらためて人間もまた自然の中の一部であることを実感します。

さて、本年度も市内各所で猛烈な勢いで開発が進んでいます。これに対応して、発掘調査も4月中旬から開始されています。今年は新たに3人の調査員を迎え、11人のスタッフで発掘調査を行います。

平成8年度最初の乙貞は、新しい調査員の横顔と新たに始まった調査を中心にお伝えします。

☆

☆ 新 人 紹 介

平成8年度、新たに小出^{こいで}岳^{たかし}君、中村ますみさん、山中由紀子さんの3人を迎えました。小出君は体力スタミナともに十分な体格を備えながら、大胆かつ慎重という印象を受けます。歓迎会のカラオケで歌った沖縄民謡^{ひょうひょう}が酔いをさましてくれました。中村さんは飄々と現地調査を進めながらも、大胆に堀削を行うあたりは、なかなか調査経験が豊富なのでは？と思わせます。山中さんは通勤をバイクから自動車に切り換えたばかりで、安心^{しんあん}？して見ていられそうです。今年度の乙貞は、3人の新たな感性とアイデアに支えられ、楽しく編集・発行をおこなって行きたいと思います。それでは、3人の自己紹介をお願いします。

☞ 小出岳 今年度から守山市立埋蔵文化財センターに嘱託^{しよくたく}として勤務することになりました。今年の3月に大学を卒業したばかりでまだまだ勉強不足ですが、問題意識を持ちつつ発掘調査に携わり、関係論文を読んでいくつもりです。のみこみが悪く、周囲の皆様方にご迷惑をかけることもあると思いますが、組織のなかの一員として認識を持ちつつ、努力していきますので今後ともよろしくお願いします。

☞ 中村ますみ この3月まで学生生活を送っていましたが、4月から守山市立埋蔵文化財センターでお世話になることになりました。今までとは全く違う環境の中で、自分自身を見つめ直したいと思います。よろしくお願いします。

☞ 山中由紀子 三重県四日市市の出身です。大学が京都だったので、滋賀県も身近に感じていましたが、守山市とはずっと縁がなく、あまり印象がなかったというのが本当のところ。守山に来てまだ2か月、道も分からないので、今のところ、埋蔵文化財センターと発掘現場との往復しかできません。発掘現場などでみかけたらどんどん声をかけて下さい。

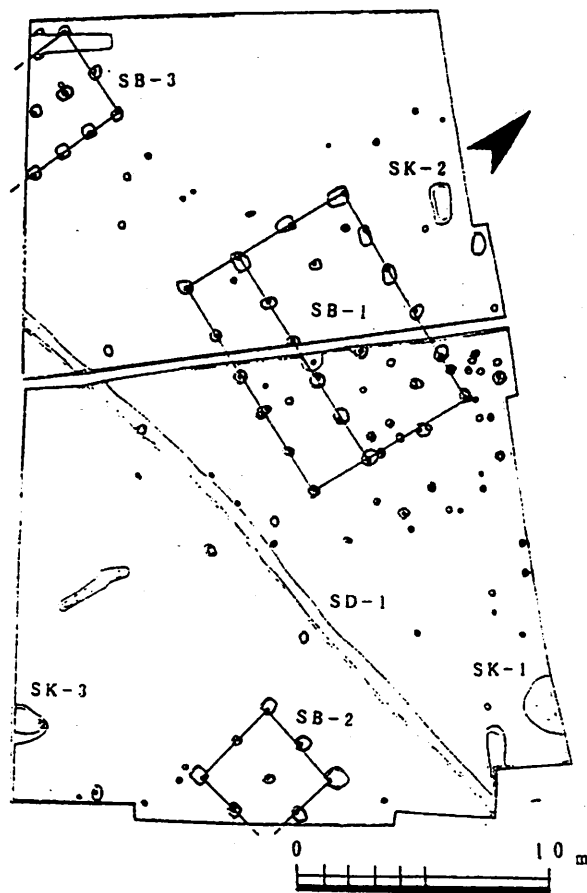
♡ 市内の調査現場で見かけたら他の調査員同様、何でも質問してみてください。

発掘調査だより

1、古高城遺跡の調査 ※ 奈良～平安時代の建物群

焰魔堂町に所在している古高城遺跡の調査を開始しました。古高城遺跡は中世の城郭遺跡のひとつと考えられていましたが、最近の調査では弥生～古墳時代の集落も存在することがわかってきています。

現在、約1,400㎡の調査地のうち北側半分の調査を終えたところです。調査の結果、掘立柱建物3棟（SB-1～3）と溝（SD-1）、土坑（SK-1～3）柱穴などを検出しています。しかし、調査地は昭和初期に建築用の土取りが行われ、著しい削平を受けていて、現存する遺構はその一部と考えられます。SB-1は2間×5間の建物で、南側に庇がつきます。SB-2は2間×2間、SB-3は2間以上×3間以上の規模となる建物です。いずれも南北方向を向き、同一時期の建物と考えられます。時期については、SB-1・2の柱穴から土器が出土していて、奈良から平安時代前期の建物とみられます。SK-1については近世の遺構と考えられます。これから残りの南側半分の調査を行っていくことにより、建物の構成や広がり



2、下之郷遺跡の調査 ※ 弥生時代中期の環濠集落の調査

4月末から下之郷町のバス停横の水田地約1200㎡を、宅地造成に先立ち発掘調査を行っています。現在、調査対象地の北西側半分について調査が終了し、残り半分の遺構検出をしています。最初に着手した北西側の調査区では、ほとんど遺構が検出されませんでした。しかし、南西側では環濠と見られる大溝や柱穴群などが検出されています。調査位置からみて、下之郷遺跡の西側を区画する大溝と推定されますが、内容については次号でお伝えできるものと思います（川畑）

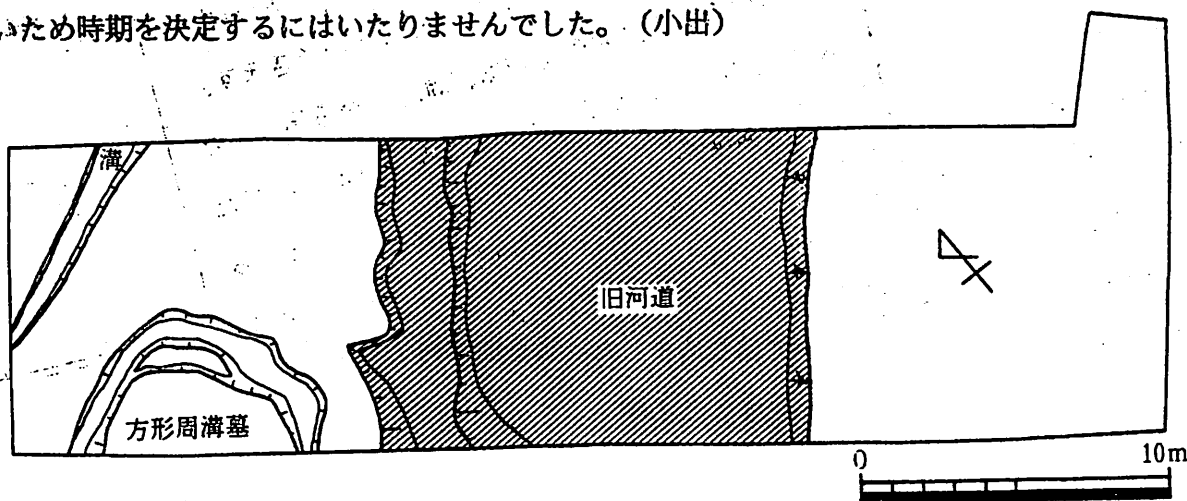
3、伊勢・大洲遺跡の調査 ※ 伊勢・大洲遺跡の境界 (6次)

5月から阿村町の南側で370㎡を対象に調査を開始しました。平成6・7年度に調査を行った地点に隣接するところです。現在、遺構検出をおこなっている最中ですが、幅約7m余りの大溝がみついています。この溝より東側では遺構密度が薄く、内側では竪穴住居や柱穴などが密集して検出されていることから、伊勢・大洲遺跡に伴う環濠の可能性も考えられます。溝の断面の観察、遺物の出土位置につ

注意を払いながら調査を進めていきます。(伴野)

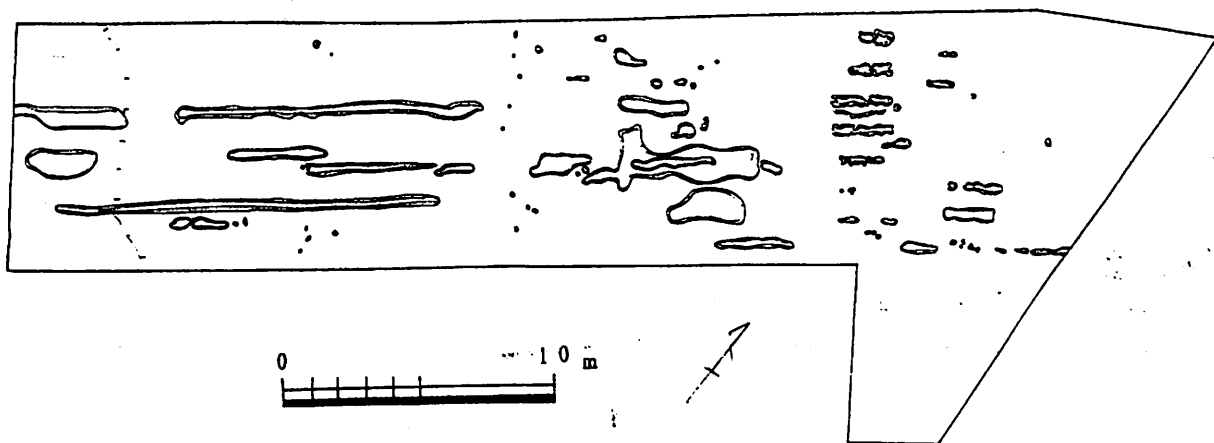
4、八ノ坪遺跡の調査(A地点)※ 古墳時代の川跡と水田

4月下旬から5月上旬にかけて、共同住宅新築工事にさきだち、約380㎡を対象に発掘調査を実施しました。今回の調査場所は、琵琶湖大橋取り付け道路の西側に位置し、以前試掘調査で石包丁が出土した地点にあたります。また、1994年に調査された第5次調査区(「乙貞」第73号掲載分)の北東側にあたり、方形周溝墓1基、溝1条、旧河道を検出しました。方形周溝墓、溝、旧河道ともに、94年の第5次調査の延長部分にあたります。方形周溝墓は南北7.7m、溝は幅0.4mから1.3mの規模を測ります。ところで、今回旧河道と報告したところは、埋土の堆積状況から、低湿地の可能性が残されています。したがって今後は旧河道が河川として機能していたのか、低湿地であればどのように土地利用されていたのか検討していく必要があります。なお、旧河道と報告したところからは土器が少ないため時期を決定するにはいたりませんでした。(小出)



5、八之坪遺跡の調査(B地点) ※旧河道と水田跡の調査

調査は4月下旬から播磨田町で、店舗建築にさきだち、約500㎡を対象に発掘調査を行っています。上層の調査では、鋤跡や柱穴、土壌などが見つかりました。ここからは、古墳時代から中世の頃の土器がでてきました。現在は、下層の調査中です。



6、塚之越遺跡（第11次調査）

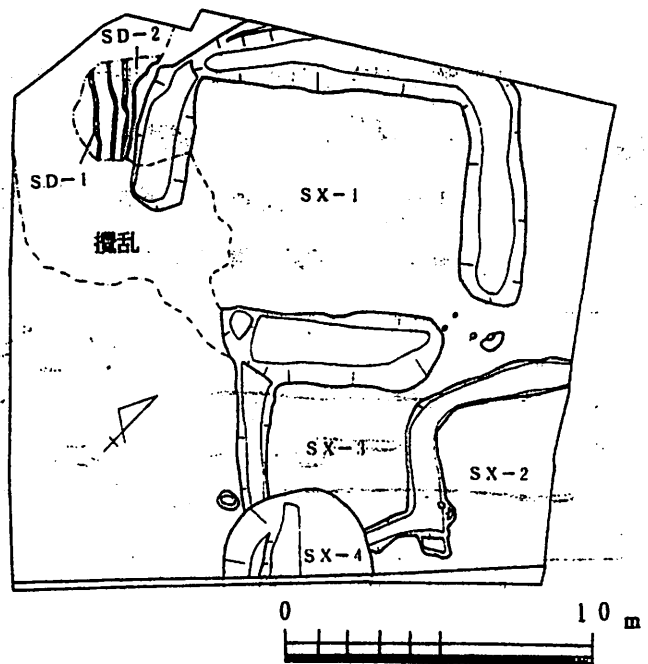
前年度から引き続き調査をしています。本年度は14,000㎡を対象として調査を行います。今までに約2400㎡について調査終了しました。発見された遺構は古墳時代後期の溝、中世の掘立柱建物、溝です。また、調査区全面にわたって鋤などによる耕作痕が残っています。前回の乙貞でふれた縄文時代の遺構や遺物については、現在も調査中であり、すべて調査終了後に報告します。（佐々木）

7、吉身西遺跡（第72次調査）の調査

調査は県立小児保健医療センターの北東約500mに位置する水田地約300㎡で共同住宅建設に先立ち、実施しているものです。この地点は守山郵便局を中心に広がる吉身西遺跡の北端にあたります。これまでに10本の溝と土壌などがみつかっています。最も大きな溝で幅約2m、深さ約1mで弥生時代中期の高杯などがみつかっています。また、最も新しい溝は10世紀と思われるものでした。調査途中のため、これらの溝の性格は不明ですが、最も大きな溝は、この地点の東側にある下之郷遺跡との関連が伺えるものです。また、調査時よりよく水がわいていたので、これらの溝は水のつきやすいこの土地特有のものかもしれません。以上のことから、今回の調査地は下之郷遺跡と吉身西遺跡の境界にあたるものと考えられます。（山中）

8、酒寺遺跡（第37次調査）

調査は4月下旬から播磨田町においてはじめました。調査面積約743㎡を発掘する予定ですが、現在その調査区の南半分の調査を行っています。この調査区からは方形周溝墓3基（SX-1～3）、溝2条（SD-1・2）、灌漑用の溜池施設1基（SX-4）、土壌などが検出されました。これらの方形周溝墓の埋葬施設は後世の削平により残っておらず、周溝だけが検出されました。方形周溝墓の規模はSX-1が一边約13m、SX-2・3が一边約6～8mで、その大きさに違いを見ることができます。これらの方形周溝墓の時期は、周溝内から出土した土器から弥生時代後期であると考えられます。また、灌漑用の溜池施設は近世以降のものであると考えられます。今後、残りの北半分の調査を行っていきます。次号の乙貞で今回の調査地の全容を報告させていただきます。（中村）



『環濠』と『環壕』そして、今。

弥生時代の集落はよく、『環濠集落』^{かんこうしゅうらく}と言われる。この『濠』^{こう}と言う文字は「水の溜まっている堀」である。だから、弥生時代の集落は水の溜まった堀に囲まれたムラであることになる。環壕の『壕』^{こう}は「空堀」^{からぼり}と言う意味で、堀の中には水がないということである。守山市に見られる環濠集落はどちらの文字を使うべきであろうか。これまでに発掘した二ノ畦・横枕遺跡や下之郷遺跡、あるいは播磨田東遺跡、さらに伊勢遺跡のムラの外周を巡っている大溝を観察すると溝の底に堆積した土層が下之郷遺跡では黒っぽい粘土で、粘性の強いものであった。二ノ畦・横枕遺跡では部分的に底が砂礫^{されき}であり、水が溜まるような感じではないところが見られた。播磨田東遺跡も下之郷遺跡と類似した粘土が堆積していた伊勢遺跡は二ノ畦・横枕遺跡と良く似た土層であった。これらから考えると下之郷遺跡、播磨田東遺跡は水が溜まっても問題はないような状況であるのに対して、二ノ畦・横枕遺跡や伊勢遺跡は雨の降った後には水が溜まるが、しばらくすると乾燥するような堀であった可能性が考えられる。この判断が正しいと、前者は『環濠』で後者は『環壕』であったことにならないか。

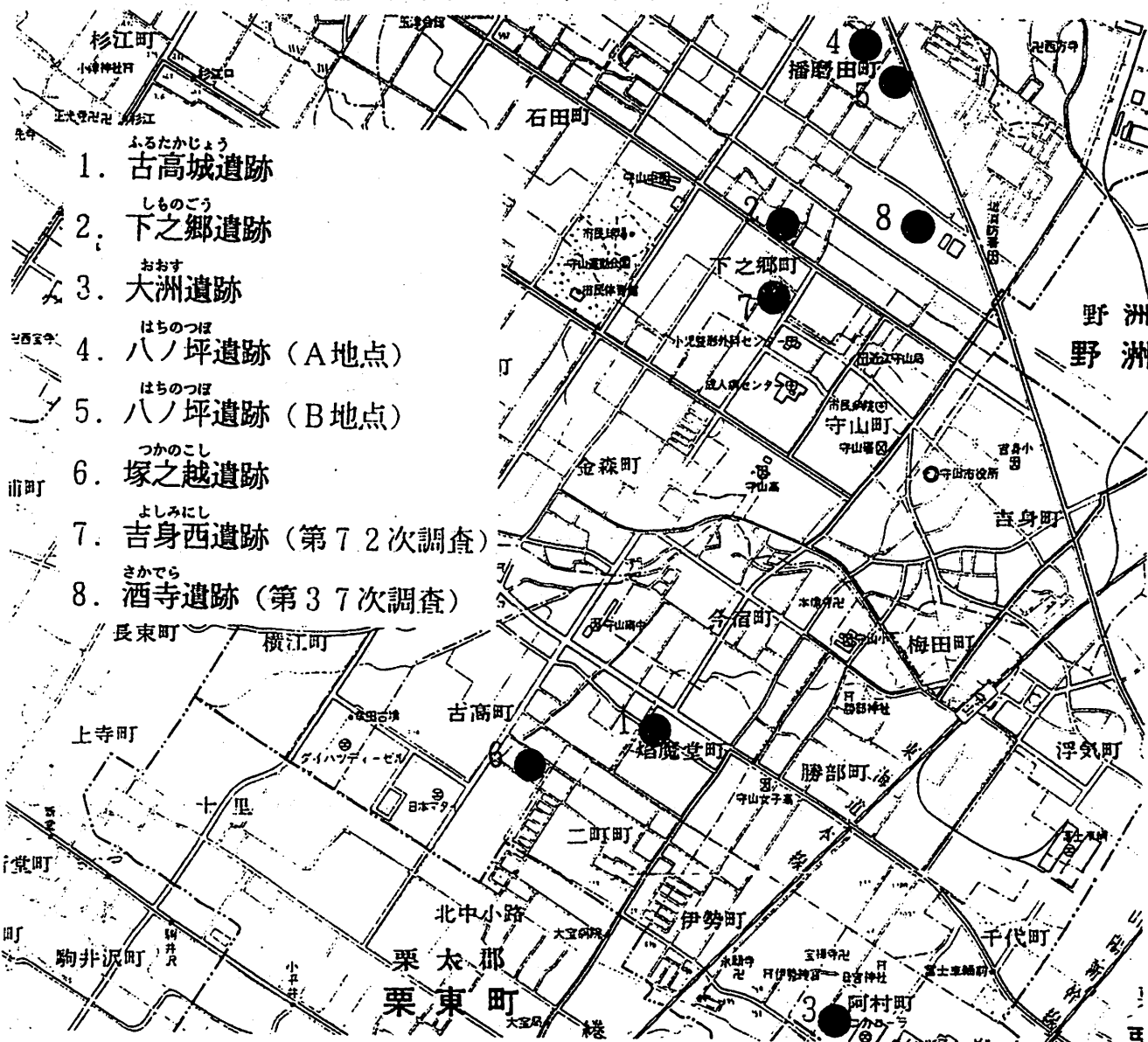
さて、弥生時代の環濠集落は吉野ヶ里遺跡^{よしのがうり}が有名である。ムラを囲む溝が二重に巡っていて、外側の堀が1kmを越える規模であり、内側が200mほどであると言われている。また丘陵上にあるムラではこのムラを囲む溝の大きさが幅約6m、深さ3～4mあるものが見られる。円形や不整形のもの、楕円形などいろいろな形もあるとされる。遺跡によって規模や形、そして溝の大きさや深さなど共通する点は少なく、ムラの周りに溝を巡らせることのみが一致するのである。さらには、弥生時代のムラ全部に環濠があるのでは無く、一部のムラだけだと言う見解もあることからすると、弥生時代にはさまざまなムラがあったことが分かるのである。守山市には現在分かっているだけでも五つの環濠集落がある。また、これらの遺跡は直径が300mを越える規模であり、全国的にも屈指の集中地である。弥生時代のムラと言われている遺跡は市内では約20箇所あるが、その内の5箇所が比較的内容の把握できている環濠集落で、その他の遺跡はほとんどが不明である。今後、この環濠集落とそうでないかも知れない遺跡との比較を通して、弥生時代の実態究明が求められる。

弥生時代にあった環濠集落は古墳時代になると消滅（環濠が埋没）する。大きな溝でムラを囲む目的は「ムラを外敵から守るため」であるとされている。しかし一部では「ムラ人が共同で作業することを目的とした土木作業の結果」であるとか、「周辺の水田に水を引く水路の一部」と言う見解もある。防衛目的や水路目的なら古墳時代にも必要であるし、戦争が頻発^{ひんぱつ}した中世以降にも当然必要であったが、その時代に該当するものは一切ない。共同作業目的も現代人には理解しがたいが、一体どのような目的であったのか確たる説はない。さらに、この環濠には当時使用した土器や木器、石器などが多量に廃棄されている状況があきらかにされている。しかし、溝を掘削してしばらくはほとんど何も捨てられてい

ないのも事実である。ムラを造り、人々が生活している最中は物を捨てることが禁止され、ある時期にはその禁止が解かれ、割れた土器や壊れた木器などを一斉に廃棄したのであろう。これも現代人には理解されない。

弥生時代のムラの実態は、今、分かっているようで分かっていないのが現状である。今年には下之郷遺跡で環濠集落を調査する機会がある。『環濠』か『環壕』であるのか検討できるだろう。(Y)

▽ 守山市内遺跡調査位置図



& 守山市立埋蔵文化財センターでは、市内の歴史理解を深めるため年6回の講座と現地見学会を開催します。第1回は6月8日(土)午後2時から「守山の寺院跡」をテーマに行います。申込み、お問い合わせは守山市立埋蔵文化財センターまで。ふるってご参加ください。

◇編集後記 新年度が始まって約2か月が経過しました。新しい調査員も職場に慣れ、実力を発揮しています。今回からはA4版の「乙貞」をお送りさせていただきます。乙貞の編集は、新人の中村調査員を筆頭に3人体制で行いますが、スロースタートながら第1号の発刊にこぎつけた次第です。迷コンビで、平成8年度の市内調査の様子を速報していきますので、よろしくご講読ください。(B)